

グルントヴィの教育思想と
フォルケホイスコーレに関する考察
—佐々木正治による先行研究に着目して—

石川 拓

**A Study of the Grundtvig's Educational thought and the Folk High School
—Focusing on the Research of Sasaki Masaharu—**

ISHIKAWA Taku

教育論叢 第58号抜刷
2015年3月

グルントヴィの教育思想とフォルケホイスコーレに関する考察

—佐々木正治による先行研究に着目して—

石川 拓

はじめに

フォルケホイスコーレ (Folkehøjskole)¹ はグルントヴィの思想に端を発し、19世紀に成立して以降、デンマークにおいて独自の立ち位置を保持するノンフォーマルな教育形態をとる民衆(成人)教育機関であり、ここで行われる教育は専門教育、職業教育とは区別され、学位の取得や特定の職業訓練を行うものではない。

フォルケホイスコーレはデンマークにおいて150年にも及ぶ歴史を持つ教育機関であると同時に、北欧諸国やドイツなどを中心に広く浸透している民衆教育機関でもある。ドイツでは市民大学 (Volkshochschule/VHS、寄宿制のものは Heimvolkshochschule) として地方自治体により設置されており、継続教育の拠点として機能している²。ドイツにおける民衆教育の研究は古いものでは江藤恭二によるプロイセンの民衆教育の歴史的背景に着目した研究³がある他、現代のドイツ社会教育における市民大学の制度及び事例については谷和明による研究⁴がある。特に民衆教育の歴史的な研究について代表的なものは、新海英行による『現代ドイツ民衆教育史研究—ヴァイマル期民衆大学の成立と展開—』である。新海はドイツの民衆(成人)教育史について1870年代から第二次世界大戦以前の時期を対象に研究を行い、民衆大学の思想と実践を中心に、ヴァイマル期民衆教育の歴史的な諸特性について新たな知見を示している⁵。ここではドイツに寄宿制の民衆教育機関としてフォルケホイスコーレを紹介した人物で日本においても知られているアントン・H・ホルマン (Anton H. Hollmann)⁶を挙げている他、フォルケホイスコーレがドイツにおけるハイムシューレ(家塾)の創設に影響を与えたことが明らかにされている⁷。新海はヴァイマル期の民衆教育に対するデンマークのフォルケホイスコーレの歴史的な影響について述べているが、デンマークの実践やフォルケホイスコーレに関する思想については深くは扱っておらず、研究の余地を指摘している。

スウェーデンにおいて民衆大学 (Folkhögskola) は、デンマークのフォルケホイスコーレの実践に影響を受けて、1868年という比較的早い段階で導入された⁸。しかし、スウェーデンの場合、民衆大学運動が始まって以降、デンマークのフォルケホイスコーレ運動との思想的相違からすぐに異なる路線での発展を遂げている⁹。現在、スウェーデンの民衆大学は職業教育を意識した教育課程を有する学校や民衆運動に強い影響を受けて設立された学校が存在する¹⁰。こうした教育活動に関する研究は盛んに行われており、例えば教育行政の観点からの生涯学習行政に関する研究¹¹や、教育制度を概観しつつスウェーデンの生涯学習社会について研究したもの¹²などがある。特に、スウェーデンの成人教育について研究を行った太田美幸は、スウェーデン社会において民衆教育の概念と機能がどのように変遷してきたのかを明らかにしたうえで、成人教育政策と現代民衆教育の意義

を「公的な成人教育」と「民衆的な成人教育」とのバランスによって形成されてきた生涯学習社会のあり方から示している¹³。この点について太田は 19 世紀後半に起きたスウェーデンの初期民衆教育運動に対して、デンマークのフォルケホイスコーレと農村民衆の精神的支柱となったグルントヴィの思想からの影響があったことについて言及している¹⁴。

フォルケホイスコーレはドイツやスウェーデンなど、それぞれの国でデンマークとは異なる発展を遂げているものの、多様な民衆・成人教育の機会として機能しているという点で共通する。北欧諸国やドイツの教育において重要な立ち位置を占める民衆教育・成人教育の役割やその意義について明らかにする上で、その始まりに大きな影響を与えたデンマークのフォルケホイスコーレと民衆教育思想の生成過程に迫ることは重要な意味を持つ。つまりグルントヴィの教育思想のうち、特に民衆教育に関わる要素について、フォルケホイスコーレの成立過程と合わせて検討しなおすことが求められる。デンマークにおける民衆教育の成立を探ることによって、北欧諸国やドイツの民衆教育に関するこれまでの研究を関連付けて捉えなおすことを可能にすると考えられる。

グルントヴィとフォルケホイスコーレに関する先行研究として、デンマークの成人教育に関する研究を行ったオーヴェ・コースゴー¹⁵や比較文化論の観点からグルントヴィとフォルケホイスコーレの成立にアプローチしたスティーヴン・ボーリシュ¹⁶が挙げられる。本稿ではデンマークのフォルケホイスコーレの成立に関する先行研究を、グルントヴィの教育思想に着目して、民衆教育の観点から整理することで成果と課題を明らかにすることを目的とする。そのため本稿では佐々木正治による先行研究に注目する。佐々木はグルントヴィの教育思想がどのような背景を持ちフォルケホイスコーレを構想するに至ったのかを明らかにしたうえで、フォルケホイスコーレ運動の展開について個々の実践を扱いながら体系的にまとめ上げている¹⁷。

1 章ではデンマークのフォルケホイスコーレの成立過程に関する研究を行った佐々木による先行研究をもとに、成立過程に大きな影響を与えたグルントヴィの教育思想がどのような背景を持ち、形成されたのかを整理する。2 章ではフォルケホイスコーレの成立過程と、フォルケホイスコーレが展開される中でグルントヴィ主義者と呼ばれる教育者達が果たした役割について検討することでグルントヴィの教育思想がどのように影響し、実践と関連付けられたのかを検討する。最後に佐々木による先行研究の到達点とその成果を示したうえで民衆教育の観点からフォルケホイスコーレの成立とグルントヴィの教育思想に関する研究の今後の課題を明らかにする。

1. 佐々木正治によるグルントヴィの民衆教育思想に関する先行研究

(1) グルントヴィの教育思想の形成とその背景

本節では、佐々木による先行研究をもとに、グルントヴィのフォルケホイスコーレ構想とそれに至る背景を検討する。

グルントヴィ (Nikolaj Frederik Severin Grundtvig 1783-1872) は聖職者、詩人、政治家、教育者などの多様な側面を持つ人物であり、19 世紀前半の社会変革の時代にフォルケホイスコーレを構想した人物である。グルントヴィはシェラン島の牧師の家に生まれた。幼少期は代々牧師の家

系であった父のヨハン・グルントヴィの敬虔主義の生活観に基づく家庭教育によって感化された¹⁸。

修行時代とされる青年期には1789年から1792年にかけてはラテン語の初歩的な教授を受け、その後1792年の秋から1798年の9月まで牧師館にてラテン語学校入学のための準備教育を受ける。1798年10月からは1800年の9月までオーフスのラテン語学校にて教育を受ける。1800年から1803年まではコペンハーゲン大学に在籍し、神学の学位を取得する¹⁹。この時期のグルントヴィは当時の聖職者として一般的な経歴を辿り神学の道を歩んでいたことが分かる。

しかし、これ以降の時期になると神学観に変化がみられ、旧来の宗教教育の限界を感じ、父親の敬虔主義のキリスト教観と決別する。そして新たな神学観のもとで教育思想を展開していくこととなった²⁰。

グルントヴィの教育思想は1805年から1808年にかけて触れたペスタロッチの教育思想とドイツのロマン主義思想、フィヒテ、シェリングらの思想に影響を受けている²¹。この時期の思想は直接的にフォルケホイスコーレ構想に結びつくわけではないが、彼の教育思想の基盤を成す部分において、ドイツの教育思想、哲学から強く影響を受けていることが見て取れる。また、彼がペスタロッチの教育思想にどのような評価をしていたのかは定かではないものの、デンマークにおいてもペスタロッチの教育思想をめぐる議論は行われており、当時の教育学の動向と無関係ではないということが見て取れる²²。このような価値観の変化は当時の教育に対する考え方の変化と呼応するものであり、グルントヴィの特殊性よりもむしろ一般性を強調しており、デンマークという文脈に限定して論じることの困難さを示唆している。

グルントヴィが本格的にフォルケホイスコーレに関する教育思想を展開するのは1808年から1830年にかけてである。1808年から1810年にかけて、グルントヴィはそれまでのロマン主義、人文主義的な傾向から17世紀後半以降18世紀にかけての啓蒙時代の思想に影響を受けた表現形態へと変化し、個性教育よりもむしろ文化や国民復興などの包括的な概念が目標として前面に押し出された²³。このような変化について、佐々木はグルントヴィが勤務していたショウボウ・インスティテュートと学院の校長ショウボウの影響や、フィヒテの『ドイツ国民に告ぐ』、あるいは北欧神話研究を経て、「国民の救済」という広い視点に立つ教育思想へと転換したと結論づけている²⁴。

グルントヴィがはじめに関与した教育問題は1814年の庶民学校令制定論議であり、その後、助教制をめぐる論争、古典学校の教育内容改革問題に関わっている²⁵。しかし、1834年の著作においてグルントヴィは、庶民学校の抱えていた困難として、農民が読み書き、計算を学ぶことの重要性を認識できておらず、子どもに教育を受けさせる意義が理解できていなかったことと、キリスト教の学習が義務化され、信仰の押しつけが行われていたことを指摘している²⁶。後者について、グルントヴィは学校を通じて信仰を押しつけようとしていることを問題としており、いわゆる「教理問答(カテキズム)」による教育を学校教育から排し、学校教育とキリスト教の分離を考えていた²⁷。そのため、こうした教育制度に関わる論争の中で、後のフォルケホイスコーレに代表されるような教育思想につながる問題意識を抱えていたことが考えられる。

1816年から1830年にかけてグルントヴィはキリスト教的教育観についてこれを固持すべきと

考えつつも、他方では問題視しており、その狭間で揺れ動いていた。徐々に後者へと傾いたグルントヴィは聖職を辞し、歴史研究の道へと進み、ナショナリズム（デンマーク主義）、国民精神、国民性、母国語、活きた言葉などの基本概念の重要性を発見した²⁸。

しばしばグルントヴィの教育思想を理解することや、彼の文献を翻訳することが困難であるとされるが、その要因は彼が辿ってきた人生において、多様な学問分野からの影響を受け、自身の思想に反映させてきたことに起因すると考えられる。また、その文章表現において、ロマン主義的な表現技法を用いていることがさらに理解の困難さを増しているといえる。それに加えて、グルントヴィの思想をデンマーク国内の文脈の中で捉えようとするにも1つの要因があると考えられる。当時の時代背景から考えれば、彼の思想は決して特殊なものではない。宗教教育や学校教育とキリスト教の分離、義務教育制度の制定とそれをめぐる論争は他のヨーロッパ諸国にも見られる問題であり、一般的なものであったからである。

(2) グルントヴィの民衆教育思想と「生のための学校」

グルントヴィは1830年代にフォルケホイスコーレ構想へと至るが、この時期にグルントヴィがフォルケホイスコーレに関して述べた文献として、1836年の『デンマークの四つ葉のクローバー (Det Danske Fiir-Kløver)²⁹』や、1838年の『生のための学校とソーアのアカデミー (Skolen for Livet og Akademiet i Soer)³⁰』がある。ここでいう「生のための学校」がフォルケホイスコーレにあたる。厳密にいえば、グルントヴィは民衆のための学校あるいは生のための学校という表現は用いているが、「フォルケホイスコーレ」という用語はこれらの著作においては見られない。

グルントヴィの教育思想は1847年頃に完成をみたとされ、1848年以降、1872年に没するまで彼のフォルケホイスコーレに関する思想を取り扱ったものは無い。しかし、その教育思想はマリエスト・ホイスコーレでの講演という形で世に出され、実践へと展開された³¹。

『デンマークの四葉のクローバー』が書かれた時期は神学者、H・N・クラウセンとの論争に敗れ、名誉棄損を問われ、1826年に当局から検閲処分を受けていたという事情が反映されている。また、1830年のフランス革命の影響を受け、デンマークに教養市民層、王国官吏、地主層、農民層からなる身分制地方評議会が設置され、その最初の会合が行われたのが1835年から1836年である³²。

ここでいうデンマークの四つ葉とは国王と民衆、祖国と母語を指し示しており、これらを最上位の価値として取り扱っている。そして民衆の社会的、文化的向上とそのための祖国・母語からなるデンマーク精神の復興を重視した新しいタイプの学校の必要性を主張している。

『生のための学校とソーアのアカデミー』は当局による検閲処分が1837年に解除された後のものである。ここでは学校制度改革や王政の廃止と民主化を求める機運の高まりを背景とし、これからのデンマーク社会に必要な人々の啓蒙・教育を行う機関として、ソーアのアカデミー構想が展開された³³。しかし、発表された当初は大きな反響は無かった。

グルントヴィの学校構想が注目されたのは1847年、クリスチャン8世が関心を示した際であつ

た。国王はグルントヴィを支援することを決議したが間もなく死去し、その後、文部大臣になったD・G・モンラッドが興味を示さなかったため、この計画は水泡に帰した³⁴。そのため、19世紀後半から20世紀初頭にかけて、フォルケホイスコーレは公的な教育機関としての立ち位置を獲得できず、民衆による自主的な運動として展開されることになった。

佐々木はグルントヴィがこうしたフォルケホイスコーレ思想を展開した背景について、30年代に絶対王政が崩壊する時期、民主主義への移行に向けた教育の重要性を認識した点にあると考え、この時期の文献をもとにして明らかにしている。佐々木はグルントヴィの構想したフォルケホイスコーレについて、対象として青年および成人に設定している点についてグルントヴィをルソーと対比し、子どもではなく若者に、個性よりも包括的な文化や国民復興へと目を向けた教育思想として扱っている。また、その目的として多様な啓蒙の形態を提示している。すなわち人間本来の自然に即すという意味で自然的啓蒙、人間の感性を重視し、身体的・精神的に活力を与えるようにという意味で情動的、精神的、活性的啓蒙、時代や社会の変化に即した教育と言う意味で前進的啓蒙、生き生きとした母国語により国民生活を国民の共通善に向って覚醒するという意味で国民的啓蒙、国民的なものと学問的なものとの差異を認めたいうえでそれらの間の相互作用を生み出すという意味で科学的（学問的）啓蒙、そしてキリスト者としての生を啓蒙するという意味で教会的な啓蒙を挙げている³⁵。上記のような啓蒙のあり方を民衆教育の基本的な要素として設定した上で、特に科学的（学問的）啓蒙と教会的啓蒙を行う学校は存在するものの、国民的・市民的啓蒙のための学校が欠如しているという意識がグルントヴィの考えるフォルケホイスコーレの理念の中に位置づいている³⁶。

このような目的を実現するものとしてフォルケホイスコーレを構想したグルントヴィであるが、佐々木はこれを「一般の成人青年（18-23歳）を対象とし、活きた言葉と生き生きとした相互作用ひいては交替作用、つまり人格的接触によって覚醒と生命力をもたらす啓蒙教育、とりわけ生命教育を基本としていた点に特質がある」と結論付け、「それは第一に人間的、国民的、民族的であることを基本とし、民族固有のものに基礎をおいていた。更に国民大学は、試験や資格に縛られない自由な制度であることを根本的特質としていた。」としている³⁷。

しかし、このような理解はあくまでも一側面にすぎないものである。対象が成人という点についてグルントヴィ自身がその著作において若者・成人を対象とするのであって、未成年の子どもが対象ではないとだけ述べている³⁸。試験や資格に縛られない自由な制度というのは後世において付与された性質である。また、グルントヴィが構想していた学校像はあくまで教会やラテン語学校、学術研究を行う大学に対置されるものとしての民衆教育機関であり、市民の生活を志向した教育であった。また、グルントヴィが30年代に書いた文献が主な研究対象となっていたが、それ以前からもグルントヴィは教育思想について著しており、後の民衆教育思想に繋がっている可能性がある。これらの点から見て、グルントヴィの民衆教育思想とフォルケホイスコーレの初期の理念を明らかにする上で、佐々木のグルントヴィに対する評価は不十分である。

2. デンマークにおけるフォルケホイスコーレの成立過程

(1) デンマークにおけるフォルケホイスコーレの成立過程

デンマークにおけるフォルケホイスコーレの成立過程について、佐々木は『デンマーク国民大学の成立史の研究』において、1892年のホイスコーレ法（Højskolelov）の制定によって一応の制度的確立をみた、としている³⁹。フォルケホイスコーレの長い歴史をどのように時期区分するかについては諸説あり、困難な課題であるが、本研究ではあくまで成立過程とそこにおけるグルントヴィの教育思想に着目するため、佐々木の先行研究に倣い、1892年の制度的確立までを成立過程として扱う。

1840年代初期から1860年代にかけてフォルケホイスコーレの原型となる教育実践が展開される。初期の頃は名称と位置づけが一貫しておらず、グルントヴィの思想にもとづくものではなく、農民の教育を行うものであった。また、この時期に開校した学校のいくつかは短期間で閉校したり、農業学校へと変わったり、あるいは後のフォルケホイスコーレ運動へと合流したのもあった⁴⁰。

この時期のフォルケホイスコーレの特徴について佐々木は、様々な方向性を持つ学校が現れたものの、どういった学校が今後成長していくのか予想できず、1864年以降、目覚ましい発展を遂げるなどと誰も想像しなかっただろう、と述べている⁴¹。

グルントヴィの思想によるフォルケホイスコーレは、クリステン・コル（1816-1870）によって実践されたが、本格的に展開され始めたのはむしろさらに後の時代、1864年のシュレースヴィヒ＝ホルシュタイン戦争での敗戦以降である。戦争による領土喪失という悲劇が結果としてフォルケホイスコーレにとって好機となり、確固たる地位を築くことになった。1844年から1864年にかけて先に述べた“農民の”ホイスコーレが建てられた数が15校だったのに対し、1864年から1869年にかけて設立されたホイスコーレは約50校にも上る。さらに1869年から1872年にかけて11校が設立されている。そしてその多くがグルントヴィ主義者によるものであった。すべてのホイスコーレがグルントヴィの思想に基づくものではなく、中には対立し競合を引き起こしたケースもあった⁴²。

1862年の時点でホイスコーレの数は15校、生徒数は500人だったが、1869年の冬には約2000人の生徒が在籍するようになり、1875年には55のホイスコーレで約4000人の生徒が学ぶようになった。1875年から1885年になると、農村地帯の若者のうちホイスコーレで学んだ、あるいは学んでいる人の割合は15%になると推定されている⁴³。

結果的にはこの時期の躍進を経てフォルケホイスコーレは特に農村地帯においてよく知られたものとなり、副次的な効果を生み出した。これまで社会階級によって農民は受けられる教育が制限されていたが、その制限を超える教育を受けられるようになったことで、既存の封建的・保守的で偏狭な考え方が刷新され、農業技術の進展がみられた。そして、フォルケホイスコーレでの教育を経験した人同士で結びつき、共同体を形成するようになるとともに、卒業後もフォルケホイスコーレで行われる公開講座に参加するなどし、学習を継続した。また、フォルケホイスコーレは農民の

生活の変革に寄与するとともに、その後1880年代に展開される協同組合運動の形成に関与した⁴⁴。

このように農民や農村に対して大きな影響を与えたフォルケホイスコーレであるが、古い保守派のエリートとの対立も起きており、1860年代から1880年代にかけて、デンマーク議会(Folketing)において論争が繰り広げられていた⁴⁵。そのような中で1892年に制定されたホイスコーレ法はデンマーク社会において一定の理解を得られ、成立期が終わり次なる段階に移ったことの証であるといえる。

(2) グルントヴィ主義者とフォルケホイスコーレ運動の躍進

フォルケホイスコーレの実践において、特に重要な役割を果たしたのがグルントヴィ主義者(Grundtvigian)と呼ばれる人々であった。

例えば、ルズヴィ・スクレザー(1836-1908)、エルンスト・トリーア(1837-1893)、イェンス・ノアゴー(1838-1913)らである。トリーアは1865年にヴァレキレに、ノアゴーは1866年にテストロップにホイスコーレを設立し、スクレザーは1865年にアスコウ・ホイスコーレで校長を務めている。彼らは都市出身で高等教育を受けており、神学者であった⁴⁶。

スクレザーはアスコウ・ホイスコーレを設立し、精力的に活動することでフォルケホイスコーレ運動の中心として活躍した。1878年からは自然科学教育を始めるなど、実験的な実践にも取り組んだ。特にアスコウでは作曲家が歌唱指導に当たることでフォルケホイスコーレの主な要素である歌を歌うことを重視し、共同生活による仲間意識の涵養に取り組んでいた⁴⁷。

また、テストロップ・ホイスコーレのノアゴーはグルントヴィの「生きた言葉」をもとにした講義を実践した。ノアゴーは神話や世界史を教授する方法として、一つ一つの物語を現在の生活と関連付けることで、単なる事実の伝達ではなく、聞き手の宗教的な価値観を強化することを目指した。このような歴史の教授はグルントヴィの教育思想を反映したものであり、デンマークの歴史に現在生きるデンマーク人たちの生活を位置づけ、一人ひとりが伝統を受け継ぐものとして歴史の中に存在することを伝えようとするものであった。こうした手法は実践者に応じて異なっていたが、その教育の根底にあるものは共通していた⁴⁸。

さらに、フォルケホイスコーレ運動の中で最も重要な要素として共同生活の経験が挙げられる。グルントヴィが民衆教育機関、フォルケホイスコーレの目的として掲げていた、民衆の社会的、文化的向上とそのための祖国・母語からなるデンマーク精神の復興を成し遂げる上で、人格的接触による生きた言葉と生き生きとした相互作用が重要視されていた。

実践においては、生徒と教師が学校で生活し、同じ食卓に着く。単に物理的な近さはもちろんのことながら、学校全体が一つの家族のように機能し、農家の家父長制的な構造を再現していた。学校は校長夫妻が所有し、名実ともに家長としての役割を担っていた。こうした緊密な人間関係の下での経験は参加した若者たちに強い影響を与え、課程が修了した後にも継続するものとなった。例えばトリーアの場合、卒業生に招かれ各地の学校に講演に行ったり、就職の手助けをしたり、入院費用の便宜を図ったりするなど、多岐にわたる若者との交流を行っていた⁴⁹。

以上、フォルケホイスコーレの成立過程において、グルントヴィの教育思想は初めのうちは注目されず、あまり強い影響力は持たなかったものの、1864年以降の実践においてグルントヴィ主義者とよばれる教育者達によって継承され、具体的なものとして現れたことが分かる。しかし、グルントヴィ自身がフォルケホイスコーレの細部にわたって構想していたわけではないため、実践への応用については、個々の実践者によって行われていた。この際、実践が展開される中でグルントヴィがその思想の中に取り込んでいったことも十分に考えられる。また、グルントヴィの影響を特に受けていたとされるスクレザーらグルントヴィ主義者達のフォルケホイスコーレにおける実践が運動の中心となっていたことから、一連の運動をグルントヴィの教育思想の現れとしてみなすことは可能であると考えられる。

おわりに—先行研究の到達点と課題

(1)佐々木正治による先行研究の到達点

佐々木はその研究によって、フォルケホイスコーレ法が制定され、制度的基盤を確立する19世紀末までのフォルケホイスコーレの成立期に注目し、フォルケホイスコーレ運動ならびにグルントヴィの教育思想の詳細を明らかにしている。

1830年代にかけてグルントヴィはもともと神学の道を志していたものの19世紀のヨーロッパ諸国において行われた学校教育制度の普及や宗教と教育をめぐる論争からの影響を受けつつ、ドイツ観念論に触れることでその思想的基礎を築いていった。そして1830年代になるとその民衆教育に関する思想を『生のための学校とソーアのアカデミー』などの著書にまとめ、民衆のための教育の重要性を主張するようになった。

しかし「生のための学校」としてのフォルケホイスコーレの実践はすぐには行われず、本格的に展開され始めたのは1864年の敗戦以降であった。1864年以降、グルントヴィ主義者とよばれる教育者達によってフォルケホイスコーレは盛んに実践され急速に普及した。そして1892年にはホイスコーレ法が制定され、フォルケホイスコーレの成立過程における一つの区切りを迎えた。

こうした事実から佐々木正治はグルントヴィとそのフォルケホイスコーレ構想について、試験や資格に縛られない制度を特徴とし、人間的・国民的・民族的なものを基礎とする成人・青年に対する教育であるとしている。さらに、そこで行われる教育方法として活きた言葉と活き活きとした相互作用の重視が指摘されている。

(2)今後の研究課題

佐々木の先行研究ではグルントヴィの教育思想の背景とフォルケホイスコーレ構想についての検討が行われ、グルントヴィのフォルケホイスコーレ構想の特質が明らかにされていた。しかし、コースゴーはグルントヴィの教育思想は1847年にほぼ完成したと見ることができるとした上で、1848年以降にはグルントヴィ自身による演説が行われており、その中で「民衆的啓蒙 (folkelig oplysning)」に関する思想を展開している、と述べている⁵⁰。また、グルントヴィがフォルケホイ

スコーレを構想した人物として扱われていたが、実際にはフォルケホイスコーレという言葉は使われておらず、民衆のための学校や生のための学校という言葉を盛んに使用していた。これらの点を踏まえると民衆教育について直接的に言及している1830年代の文献を中心に扱った佐々木の検討は不十分であり、グルントヴィの民衆教育思想に関する再検討の余地が大いにあるといえる。

そして、グルントヴィとフォルケホイスコーレの歴史的な意義について佐々木はデンマーク国内での文脈に限定した論考を行っているが、グルントヴィとフォルケホイスコーレ運動が各国に影響を与えたことは事実である。このことから、グルントヴィとフォルケホイスコーレをヨーロッパにおける民衆教育と教育思想の流れに位置付け、民衆教育的な意義という観点から評価する必要がある。こうした作業を通じて民衆教育の歴史に迫ることで、北欧諸国やドイツにおける民衆教育の思想と実践に関する研究の発展に貢献するだろう。

〔注〕

- 1 デンマークの公的機関が英語訳として使用しているものは、「Folk High School」である。日本語の訳に関しては定訳が存在せず、国民高等学校、市民大学、民衆大学等の訳が存在するが、本稿ではデンマークのものを示す際には、フォルケホイスコーレの表記で統一する。
- 2 新海英行・牧野篤編「17章ドイツ成人教育・継続教育制度改革の経緯と到達点」『現代世界の生涯学習』、大学教育出版、2002、pp.255-258。
- 3 江藤恭二「プロイセン民衆教育展開史序論—とくにその社会的背景と発生期における民衆教育を中心に—」、『教育学研究』、1956、23号、pp.2-17。
- 4 谷和明「ドイツ市民大学連盟の組織と事業：生涯学習におけるNGOs（非政府組織）の役割という視点から」、『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』、1998、24号、pp.173-190。
- 5 新海英行『現代ドイツ民衆教育史研究—ヴァイマル期民衆大学の成立と展開—』、日本図書センター、2004、pp.8-9,475-479。
- 6 ホルマン原著、永野芳夫編、輯木下一雄訳著『丁抹の国民教育と国民大學』、モナス、1926。
- 7 新海、前掲書、pp.89-97,199。
- 8 太田美幸『生涯学習社会のポリティクス—スウェーデン成人教育の歴史と構造』、新評論、2011、pp.122-125。
- 9 同上、pp.130-135。
- 10 松田弥花「スウェーデン民衆大学における教育と学びの特質」、『生涯学習基盤経営研究』、38号、2014、pp.41-51。
- 11 三瓶恵子「スウェーデンの生涯学習行政（III 各国の生涯学習行政）」、『日本教育行政学会年報』、1990、16巻、pp.94-106。
- 12 神野直彦「スウェーデンに学ぶ生涯学習社会」、『国立女性教育会館研究紀要』、2002、6巻、pp.39-44。
- 13 太田、前掲書、pp.332-343。
- 14 同上、pp.119-122。
- 15 オーヴェ・コースゴー著、川崎一彦監訳、高倉尚子訳『光を求めて—デンマーク成人教育—』500

- 年の歴史』、東海大学出版会、1999。
- 16 スティーヴン・ボーリシュ著、難波克彰監修、福井信子監訳『生者の国 デンマークに学ぶ全員参加の社会』、新評論、2011 (“The Land of the Living: The Danish Folk High Schools and Denmark's Non-violent Path to Modernization”, Steven M. Borish, Blue Dolphin Publishing, 2004)。
- 17 佐々木正治『デンマーク国民大学成立史の研究』、風間書房、1999。
- 18 佐々木、前掲書、pp.79-83。
- 19 同上、pp.84-88。
- 20 同上、pp.87-88。
- 21 同上、pp.98-127。
- 22 同上、pp.100-104。
- 23 同上、pp.130-137。
- 24 同上、pp.137-139。
- 25 同上、pp.23-78。
- 26 N.F.S.グルントヴィ著、小池直人訳『生の啓蒙』、風媒社、2011、pp.88-95。
- 27 同上、pp.92-95。
- 28 佐々木、前掲書、pp.159-166。
- 29 N.F.S.グルントヴィ著、小池直人訳『ホイスコーレ上』、風媒社、2014、pp.9-91。
- 30 同上、pp.121-203。
- 31 コースゴー、前掲書、pp.153-156。
- 32 同上、pp.288-289。
- 33 同上、p.308。
- 34 ボーリシュ、前掲書、pp.199-200。
- 35 佐々木、前掲書、pp.211-230。
- 36 グルントヴィ、前掲注 29、pp.144-148。
- 37 佐々木、前掲書、pp.254-258。
- 38 グルントヴィ、前掲注 29、pp.46-49。
- 39 佐々木、前掲書、pp.15-16。
- 40 コースゴー、前掲書、pp.162-167。
- 41 佐々木、前掲書、pp.330-332。
- 42 コースゴー、前掲書、pp.171-176。
- 43 ボーリシュ、前掲書、p.226。
- 44 同上、pp.239-240。
- 45 同上、pp.240-246。
- 46 同上、pp.226-227。
- 47 同上、pp.226-229。
- 48 同上、pp.229-230。
- 49 同上、pp.230-235。
- 50 コースゴー、前掲書、pp.153-156。